

「未来の沖縄の観光」

沖縄尚学高等学校附属中学校 1年 具志 幸龍

沖縄は北海道に次いで人気の観光地と言われています。レンタカーが数多く走り、あちこちで外国語が飛び交う様子は日本国内はもちろんのこと、外国からも観光地としてスポットが当たっているんだなと実感できます。

沖縄は日本でも独特の文化、言語、自然を持ち備えているので、アピールしやすい要素は多々あると思います。この島を取り巻く環境のみならず、生活面、食のスタイルにしても沖縄の日常は独自の文化で形成されています。お盆やお正月の過ごし方、冠婚葬祭、どれを取ってもそこには「沖縄らしさ」をうかがい知ることができます。このような「沖縄らしさ」は、古くから沖縄が中国や朝鮮と交易をし、戦後はアメリカの文化を取り入れて発展を遂げてきたという時代背景が一因していると思います。悲しい歴史もありましたが、沖縄は荒野を乗り越え、沖縄の軸となる部分は失うことなく、他を吸収し、今に至っています。ぼくはこうした沖縄の言わば「融合性」が好きです。

そして、沖縄の魅力は島の持つ自然の美しさにもあると思います。沖縄の緑は濃く、海のとつ明度は高く、絵に書いた美しさがあります。空の青とのコントラストはとつ目を引きます。また、その自然に生息する動物や魚は色鮮やかに生き、人の心を魅了ます。

しかし、そのような美しさの中でぼく達の先人は安のんに暮らしてきたわけではありません。沖縄は古くから「台風の通り道」と言われてまきました。この台風と戦うため、家の周囲にフクギを植え、石垣をほどこし、屋根はしつくいので止める。やがて、家はコンクリート造りが主流となり、沖縄独特の町並みを作り出ましました。

沖縄が他と違つて魅力的に見えるのはやはり、こうした他国との交わり、自然との融合、守られてまきた沖縄の文化が上手くかけ合わさつて異彩を放っているからだと思います。そんな今を生きるぼくにとつて、過去を振り返れば振り返るほど、沖縄の先人達は本当にたくましいなと心から尊敬ます。祖父母に聞く沖縄は戦後、焼け野原でした。そこに家が建ち、畑が耕やされ、産業が発達し、今や観光立県としての地位を手中にしています。目覚ましいスピードで

ぼくは先日、豊見城市にある瀬長島に行つてまきました。ぼくが小さい頃、よく行つていた瀬長島とは似ても似つかない島となつていまました。ぼくは幼い頃、よく両親に連れられて、この島に泳ぎに行つたり、カニやエビを取りに行つていまました。それが今、この島の高台にはホテルが建ち、傾斜面にはショッ

ブヤレストランが所せましと並んでいます。店はまだ拡張されるようで、新しい店舗が工事中でした。ぼくが家族とバーベキューをしていた場所はきれいに整地され、簡単には入れないようになっていました。

ぼくは海をのぞめるテラスで食事をしました。芝生の先には一面に広がる青い海。風に吹かれながら、隣の観光客の人が言っていました。

「やっぱり雰囲気って大事だよな。雰囲気。」それを聞いて、ぼくはなるほど、沖縄に来ている人達はこうした雰囲気も楽しんでいるんだなと思いました。確かに、このイタリアはサントリーニ島のような雰囲気は青い海を持つ沖縄でしか作れない。小さい頃、親しんだ瀬長島はもうないけれど、美しく様変わりした瀬長島はそれはそれでいいものだなと思いました。

沖縄はこれから観光立県として日本をけん引していく立場にあると言われていきます。あちこちで開発が進んで行くのでしょう。時代に応じて生まれ変わる沖縄、ぼくはほこらしく思います。先人達がそうしてきたように、古き良き物は残し、自然をいつくしみながら発展していく沖縄は未来に輝く存在になれると信じています。